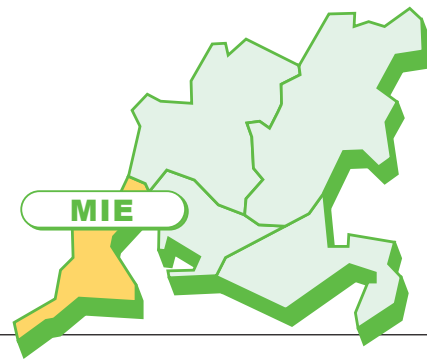


中部 だより

中経連事務局員が、担当するエリアでお聴きた、各県の最新トピックや地域特有の情報を紹介するコーナーです。



地域にあるものを見つけ、磨く ～地域資源を生かした南伊勢町の取り組み～

1. 南伊勢町が抱える課題

南伊勢町は、紀伊半島沿岸の東部に位置し、熊野灘に面した海岸線を中心に町域の約60%が伊勢志摩国立公園に指定される



鵜倉園地の見江島展望台から見えるハート型の入江「恋人の聖地」に認定された人気スポット

風光明媚な景勝地を有する。一次産業が盛んで、とりわけ漁業の割合が高く、県下の漁獲量を誇る。近年では漁業の高付加価値化を目指して、カキの養殖、アワビの陸上養殖の実証実験、ヒロメ（ワカメの近縁種）の養殖技術確立の取り組みなども行われている。町の85%を山林が占め、可住地

面積が少ないことに加え、若者の流出や少子高齢化が進行し、深刻な人口減少に直面している。将来人口推計では、2040年に6,430人（ピーク時の約20%）、2060年には3,372人にまで減少すると予測されている。



2. 起死回生に向けた総合戦略の策定

厳しい将来人口推計が示される中、南伊勢町では人口減少による町の衰退を防ぎ、持続可能なまちづくりを図るための総合戦略を2016年に策定。さらに、2019年にはこれを見直した新たな総合計画「新絆プラン」を策定した。

新絆プランでは30年先を見据え、30年かけて南伊勢町を100年、200年と存続し、幸せに暮らし

ていける町にするための目標、戦略を策定し、その実現に向けてさまざまな対策に取り組むこととしている。

新絆プランの特徴的な取り組みとして、町が設立した地域商社※「みなみいせ商会」と南伊勢高校のSBP（ソーシャル・ビジネス・プロジェクト）があげられる。

※地域商社：農産物など地域資源のブランド化や地域資源の域外販売に取り組む組織

3. 地域資源を見直し、活用するための取り組み

（1）地域商社 ～みなみいせ商会～

2017年に設立されたみなみいせ商会は、南伊勢町の産業振興を推進する事業体設立に向けたプロポーザルに端を発する。プロポーザルでは、首都圏における三重県の営業拠点・三重テラスで運営責任者を務めていた小川伸司さんが事業者として選定された。

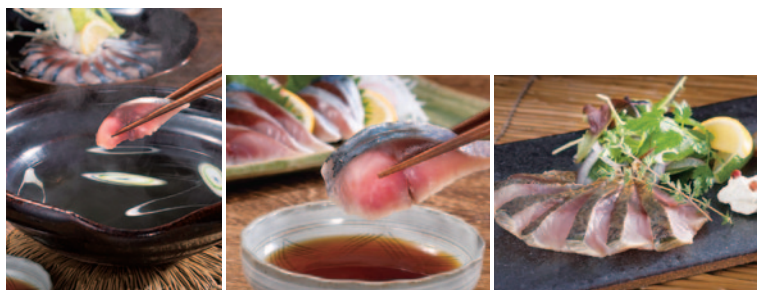
福岡県出身の小川さんは、県外出身者視点で南伊勢町にある地域資源を調査。全国有数の漁獲量を誇るサバをはじめとする海産物に着目し、サバ・イワシ・タイなどの魚類や貝類を「海なし県」の滋賀県で販売したところ、新鮮な海の幸は好評を博し、毎回売り切れるほどのポテンシャルを確認した。

南伊勢町は、この実績をもとに、海産物の移動販売の事業化や地域資源を生かした商品開発、これらを通じた雇用創出などを目的に、みなみいせ商会を設立した。

商品開発では、町の新たな名物として、サバを使用した



おかげ鯖の加工風景



左から、鯖しゃぶ、しめ鯖、冷燻

「おかげ鯖」を商品化。2018年4月から「鯖しゃぶ」「しめ鯖」「冷燻」の3種類の販売を開始した。これには、全国トップクラスの漁獲量を誇りながら知名度が低く、地元でもあまり食べられていなかったサバを、重要な地域資源として磨き上げていこうという思いが込められている。消費者からの評判もよく、おかげ鯖は、みなみいせ商会のオンラインショップでも人気商品となっている。

雇用創出では、地域おこし協力隊の制度を活用し、みなみいせ商会で働く職員を募集したところ、Uターン就職も実現している。

小川さんが手掛けた滋賀県での海産物の移動販売をきっかけに、南伊勢町は「海の幸を充実させたい」と考えていた滋賀県東近江市と、互いの地場産品の販路開拓や新商品開発などに関する地域連携協定を締結。相互の地域視察をはじめ、さまざまな物販イベントを行っており、今後のさらなる連携強化が期待される。



南伊勢町での漁港視察研修(左)、東近江市での物販イベント(右)

(2) 若者の活躍 ～南伊勢高校SBP～

SBPとは、高校生が地域の課題をビジネスの手法を用いて解決する取り組みのこと。テレビドラマ「高校生レストラン」で一躍有名になった相可高校の生徒が運営するレストラン「まごの店」をプロデュースした岸川政之さんが、南伊勢高校の南勢校舎へ出前授業を行ったことに端を発する。キャリア教育や地域活性化に関する授業を受けた生徒たちは、地元の活性化のために自分たちにも何かできることはないかと思い立った。

最初の取り組みとして、生徒たちは南伊勢町に住んでいながら地域のことを知らなかったことから、地元の事業所や商店などを訪問し、地域にあるものの価値を知る活動を実施。活動を通じて出会った南伊勢町の素晴らしいものを高校生の感性でお勧め商品として発信し、地元を離れた人たちにそれらを手に取ってもらうことで故郷を思い出してもらう「セレクトギフト」の販売を企画した。生徒たちの活発的な姿勢に大人たちは感動し、教員のみならず、地域住民や町職員の協力も得て実現にこぎつけた。

最近では、南伊勢町が制作する地場産品を紹介する動画にレポーターとして出演するなど、活動の幅を広げている。今後の展望について3年生は、「熊本県の高校と非常食用の缶詰をつくるプロジェクトに取り組んでいるが、コロナ禍で思うように活動ができなかったため、自分たちが叶えられなかった夢を下級生に実現してもらいたい」と期待を寄せていた。



SBP活動での食品販売(上)、南伊勢高校南勢校舎のSBP部員(下)

4. おわりに

「まちおこしや地域創生は、その地域に暮らす人たちが、どれだけ自分たちの地域にある資源を知っていて、どれだけ自分たちの地域のことを想っているかにかかっている」と岸川さんは強調する。南伊勢町では、県外出身者や地元の高校生が自分たちの暮らすまちに眠っている素晴らしい資源を知り、活用することを通じて、より良いまちにするために懸命に努力している。南伊勢町の地域創生に向けたさらなる挑戦はどのように進化していくのだろうか。期待に胸が膨らむ。

文：三重担当 柳田 智之

取材協力：南伊勢高校、南伊勢町、岸川政之氏